



Title	増毛方面トレイルの構築に向けて
Author(s)	門脇, 賢司
Description	セッション2: ヘリテージツーリズムの取組み
Relation	先住民文化遺産とツーリズム : 北海道の可能性(International Symposium: Indigenous Heritage and Tourism - Potential in Hokkaido). 2012年10月13日-14日. 北海道大学学術交流会館小講堂, 札幌市.
Issue Date	2012-10-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51254
Type	conference presentation
File Information	session2report4.pdf



International symposium 2012 Indigenous Cultural Heritage and Tourism

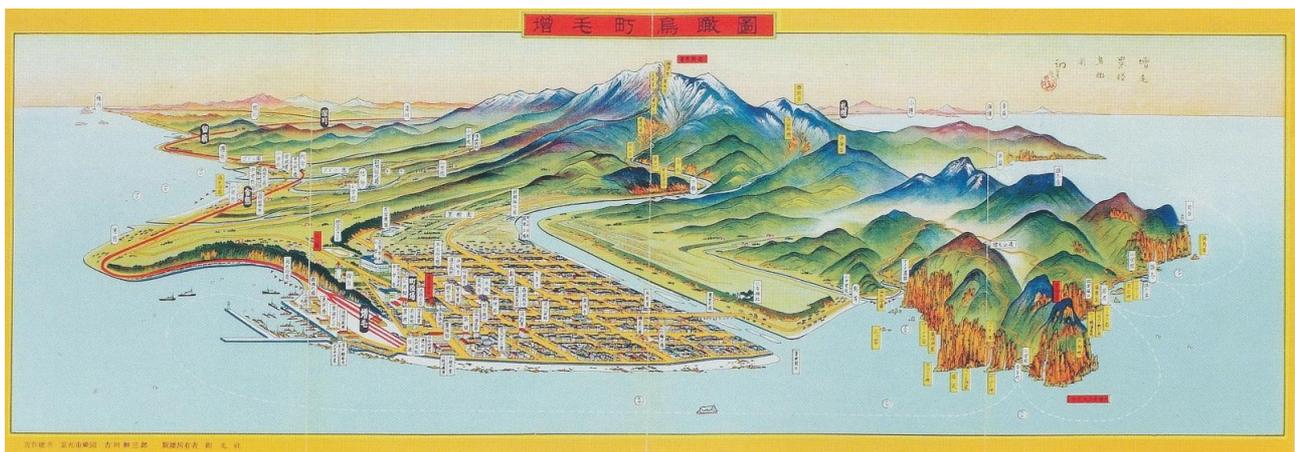
国際シンポジウム
先住民文化遺産とツーリズム
-北海道の可能性-

『増毛方面トレイルの構築に向けて』

門脇 賢司

((財)アイヌ文化振興・研究推進機構アイヌ文化アドバイザー)

増毛町とは、札幌からは約120kmのところにあつて、幕末には秋田藩によって北方警備の拠点として元陣屋が築かれ、明治から昭和にかけてはニシン漁で栄えた町です。地名の由来はアイヌ語のマシケ、カモメのいる所という意味です。このあたりの海にニシンが群来るときにはカモメでいっぱいになるということからきているようです。もともとはいまの浜益がハママシケと呼ばれていましたが、そこの運上屋がここに移ってきて、ここがマシケといわれるようになったとのこと。それ以前はポロモイといって、これは大きな入り江といった意味です。さらに古い記録にはアイヌの居住についてふれた部分があり、西暦で1800年代はじめのころには85軒、437人。1800年代のなかばには37軒、136人。それがわずか4年の後には11軒に減り、あとは近くの別荘という土地に居住しているとあります。もっともその痕跡は現在ではほとんど見ることはできませんが・・・。



吉田初三郎『増毛町鳥瞰図』（北海道大学附属図書館北方資料室所蔵）

ここは私の母の出身地なので、ご先祖さまの墓参りなどで訪れる機会が多々ありまして、そこで目にしたのがこの一枚の絵でした。大正から昭和にかけて3000枚以上の鳥瞰図を描いたという吉田初三郎という人が昭和26年に描いた増毛町の鳥瞰図です。この中に「アイヌ遺跡」と書かれた部分があつて、非常に興味を持って現代の地図で見ると、どうやら増毛町の手前、別荘の辺りに大別荘カムイトチャシというのがあることがわかりました。かつて土器や獣骨などが出土しているようです。



別荘という地名の由来はアイヌ語のペシュ・トゥカリ。これは水際の崖の手前という意味で、その名のとおりこのあたりの海岸線は急峻な崖になっていて、国道も山側を通っています。国道から川を渡り、チャシのあたりに近づけないかとも思いましたが、道路から川に下りる落差がかなりあるため、この方法は少し厳しそうです。その為現在では近くに寄ることができず、また、遠景ではまったく山しか見えないので、明確なチャシ跡そのものは残念ながら確認できていません。地図を見ると、この大別荘川沿いにチャシ跡があるようなので、この川を遡ればその痕跡を確認できるかもしれません。どなたか私と一緒に探検してみませんか？



こちらはカムイェト岬といいます。カムイェトとは神の岬という意味です。松浦武四郎の西蝦夷日誌によると昔、源義経が山越えてここへ下りられた跡としてアイヌの人たちがイナウを立てて祀っているとあります。が……。ここも岬が道路からはるかに離れているので、近づくことはかなり困難です。なにかそういった伝説の痕跡でも見つけられたらとは思っているのですが……。



こちらは近づける岬。赤岩岬と呼ばれていますが、バスの停留所には今もケマフレとあります。アイヌ語でケマは脚、フレは赤。その名のとおり、岬の根元が赤くなっていて、現在でもアイヌ語地名の由来を実際に目に見ることができますし、実際に赤い岩のうえに立つこともできます。



信砂（のぶしゃ）アイヌ語のヌプ・サム・ペツで、野の・傍らの・川。松浦武四郎は安政三年(1856)に石狩川→恵岱別川→仁奈良峠を越え、信砂川の川筋を通り、留萌への道を拓きました。河口付近には「松浦武四郎信砂越えの地」の標柱があります。裏側には安政三年五月箱館奉行勤番手付として西蝦夷地巡回のためイシカリの国イタイベツから国領マシケに向け出発。この地は信砂前浜到着地である。とあります。

この近辺には他にも何ヶ所か気になる場所があり、列挙しますと・・・
阿分（あぶん）ここは古い地図ではアフニといった所で、入り込んでいるという意味です。道内の各地にアフン・ル・パル「(あの世へ) 入る・路の・口」(通称地獄穴)と呼ばれるところがありますが、この土地にもそうした洞窟がある。と更科源蔵の著したアイヌ語地名解という本にあります。確かに国道沿いからみた山側は、いかにも洞窟がありそうな崖になっており、まずはそれらしい洞窟を探してみたいと思っています。
次に舎熊（しゃぐま）。アイヌ語でイ・サッケ・クマ、魚を乾かす棹という意味です。場所柄、海岸に魚を乾かす場所があったのではないかとのことです。また、ここには舎熊神社という古い神社が残っていて、もとは文久元年(1861)に道南の江差町のあたりで奉斎されましたが、明治10年ころにこちらに移されたとのこと。また、神社の中に舎熊遺跡がありますが、現在は看板だけがその面影をのこしています。この地域から広範に縄文中期、

北筒式、後期及び晩期の続縄文、擦文土器が出土しています。とあります。看板にはその後に「遺物包含地として、この一帯は別にして貴重であって別にアイヌ人達の遺骨並遺物も出土する」と書かれています。そして、増毛町内にはかつてニシン漁で栄えた時代の面影を残した歴史的建造物が残っていて、これらは北海道遺産にも選定されています。



道内最古の木造校舎、旧増毛小学校は昭和 11 年建築。特筆されるのはその規模で中央に中庭を配し、周りをぐるりと木造 2 階建て校舎と体育館が囲んでいる形態で約 1,000 人もの児童を収容できるものでした。体育館の天井のトラス構造が見事なのですが、現在は中に入ることができないのが残念。



巖島神社。宝永年間（1704-1708）にマシケ場所請負人・村山伝兵衛の運上屋の氏神「弁天社」として創立したのが始まりと伝えられています。文化年間（1804-1818）には請負人が伊達林右兵衛に替わり、文化 13 年（1816 年）に安芸の巖島神社より分霊を頂き「巖島神社」と称するようになりました。本殿は総檜作りで、増毛町の有形文化財に指定されています。拝殿内には江戸時代後期の作の奉納絵馬があり、正面および本殿の彫刻と平子聖龍による天井絵も見事です。

ほかにも、旧商家丸一本間屋は「丸一本間」の屋号で、呉服商にはじまり鯨漁の網元、海運業、酒造業など時代とともに多岐にわたり事業を展開し、家屋もそれに伴って増築していきました。今は、100年前の建物の内部を見学できるようになっています。

国稀酒造は蔵を開放し、試飲も出来る日本最北の酒蔵です。

元陣屋には郷土資料室があり、幕末に秋田藩によって元陣屋が築かれ北方警備の拠点として機能した増毛町の歴史を見ることができます。

以上に紹介させていただいた場所を巡りながら、今後ヘリテージツーリズムにご参加いただける方に、楽しく、また知的好奇心を刺激することができるようなトレイルを構築し、提案させて頂くことができるように、このテーマをもっと深く掘り下げていきたいと思っております。

※出典記載のない写真は報告者撮影。